

大学図書館問題研究会 京 都

URL : <http://www07.u-page.so-net.ne.jp/rg7/dtkk/index.htm>

〒621-8555 京都府亀岡市曾我部町南条1-1 京都学園大学総合研究所事務室 大館和郎気付

(TEL) 0771-29-2392 (FAX) 0771-29-2388

2002年 近畿4支部新春合同例会のご案内 「奈良は歴史の桜舞台」

倭国女王ヒミコのもとに届く鏡百枚
応神天皇に届く護刀
聖武・聖徳太子に届く書物…

講師 水野正好氏（奈良大学前学長）

日時 2002年2月9日（土） 午後1時30分～午後4時30分

会場 奈良県女性センター 3F 会議室C

奈良市東向南町6番地 TEL 0742-27-2300

近鉄奈良駅下車徒歩3分、JR奈良駅徒歩15分

会費 500円

参加申込先：京都支部員は

支部長 大館和郎（京都学園大学総合研究所事務室）まで

TEL 0771-29-2392 FAX 0771-29-2388

E-mail odate@kyotogakuen.ac.jp

お茶会：例会終了後 水野先生を囲んでのお茶会

懇親会：月日亭 近鉄奈良駅前店 TEL 0742-23-5470

（奈良市東向中町6 奈良県経済倶楽部ビル2F）

会費：5,000円

【お知らせ】

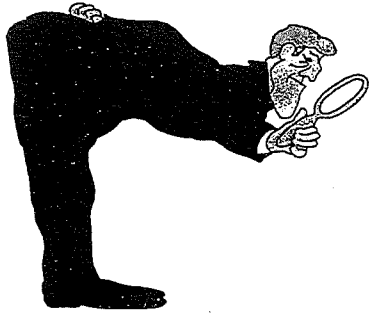
支部報編集部では会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。ホームページから投稿ができます。どしどし投稿をお願いします

●大図研京都支部ホームページ●

<http://www07.u-page.so-net.ne.jp/rg7/dtkk/>

近畿4支部新春合同例会のご案内	1頁
お知らせ	1頁
私のインターネット活用法	2頁
ブラウジングの楽しみ	4頁
鈴木書店の破産について	5頁
第6回支部委員会の報告	6頁
会費納入のお願い	6頁
編集後記	6頁

ご意見・ご要望、投稿はメール、又はFAXで
(dkamr302@kyoto.zaq.ne.jp) takita まで



私のインターネット活用法

吉田 誠

題は私のインターネット活用法である。困ったことに、披露できる知識の持ち合わせなどない人間で、原稿の依頼もお受けするべきではなかったのだが、小話やエッセイ風のもので良いということだったのでお引き受けした。よって今回は仕事に使えるような有用なネタはありません。あらかじめご承知おきのほどを。

私は電車に乗るのが好きで、旅行の準備や調べ物でインターネットを利用することがある。わざわざ駅に行かずとも WEB サイト上から指定席の手配もできるし、私鉄の中には特急の指定席を予約すればチケットレスで乗車できるものもある。また、指定券が完売になっていても、中には足元を見て吹っかける輩もいるが、Yahoo!などのオークションで手に入れることもできる。

昔は旅行のきっぷの手配など、みどりの窓口、しかも国鉄時代なら無愛想、非効率、に並んでしていたことを考えると、確かに便利になったものだ。しかし、同じ旅行の手配でも、ホテルなどはインターネットで予約するとながしの特典がつくところが多いのに対して、鉄道のきっぷをインターネットで手配しても別に特典がつくわけではない。



手配するためには登録や利用プロバイダなど面倒な条件があることが多い。加えてきっぷの発売開始は、JR 線ではみどりの窓口の方が早い。だから鉄道関係でインターネットを使うと言ったら、時刻表を調べる人が多いのではないかと思う。

分厚い紙の時刻表では、まず目的の路線が何ページにあるのか調べて、あったと思ったら今度は乗換えの電車が載っているページを探さなくてはいけない。インターネットで調べるには、乗る日と出発地、目的地を入力すればすぐに最適な電車、乗換えを教えてくれる。

だが私にとっては、ダイヤは時刻表を自分で繰って調べる方が楽しい。宣伝も混じるが、私の勤務している京都大学の工学部では秋に文献収集講座を開催している。ここでは職員がデータベースの操作法などを説明するだけでなく、お招きした教授に私の文献収集法というテーマでお話していただいているが、昨秋お話をお願いした先生はセレンディピティの楽しみということを言っておられた。

電子ジャーナルで論文が簡単に手に入る時代だけど、図書室の書架をうろうろして本を探していると、たまに思わぬ拾い物がある、ということなのだが、時刻表を繰るのも私にとってはこれと同じでことなのである。この手のわかる人にはわかる、ということを読文を連ねるしかできない私が縷々説明しても「ヘンな人だ」で終わるのが関の山だろうから、理由の説明は止めておく。

きっぷの手配、ダイヤ検索と、けなしはしたがインターネットにより時間の節約が可能になったのは事実である。しかし、ネットがなげりゃよかった、と思わされることもある。

今年の正月休みは青春18きっぷ（一日約2,000円で新幹線や特急以外の電車に乗り放題のきっぷ）を使って実家に帰省した。夜行の快速を使うと移動時間も短縮できるので、指定席を生協に予約しておいたら、発売当日連絡があり、喫煙席しか残っていないとのこと。昔からこんな指定券が取りづらかったものかと疑問に思ったが、ないと言うのだからない。

後日、18きっぷの有効期限を確認しようと思ってインターネットを検索したら、18きっぷ



関係のページが出てくる出てくる。利益のことを考えてか、JRのネット上での宣伝は控えめで、出てくるのはまず個人ページである。その個人ページを見ると、人気電車の指定席入手法なんてものがある。

入手法と言っても、指定席車両の運用を押えた上で指定券を頼むだけだが、車両運用など普通の人は知らないだろう。マニアが知っていることに属すると思うのだが、入手方法を懇切丁寧に教えてくれる上、ご丁寧なことにソースには<META>タグでヘッダーに記入してあり、検索エンジンに上位で引っかかるようにしてある。

鉄道関係の本にも入手のコツが書かれてはいたが、部数の知れた鉄道本とインターネットでは、影響度は比べ物にならない。これではマニアもへったくれもない。ネットがなければ一般人の人は入手法を知ることもなく、私は平和に禁煙席を取れたであろうにと、恨めしく思ってしまう。自分(達)だけが知っていればいいとは、情報の媒介役でもある図書館員の立場では言えないことなのだが。

ネットの特徴の一つに「ボーダー」をなくす働きがあると思う。これなどマニアと一般人の間のボーダーをなくしたケースである、と言えるだろうか。例えば出会い系掲示板での援助交際の呼びかけなど、法律や道德面におけるボーダーすらも曖昧になるご時世だが、図書館ではどうだろう。

大学図書館では学内者と学外者の間にボーダーが引かれている。合理性はあると思うが、中に制限しなくてもいいだろうと思うものがある。例えば大学が契約している電子ジャーナルのリストである。インターネット上で公開してあるところが多いと思うのだが、学外からアクセスできないリストも少なからずある。

出版社にとって、論文ファイルは大事な商品だから論文本体へのアクセス制限はわかる。しかし、リストそのものが学外から見えたところで、出版社に損害が出るわけでもない。出版社との契約について、頭を悩ますこともあるかと思うが、他大学の事例として参考になるだろうから、リストを見ることができるとありがたいと思うのだが。

「なぜあの大学では使っているのに、うちでは使えないんだ！」と蕞蛇になる可能性は否定できないが。

曖昧になると言えば、著作物の世界でも生産者、流通者、消費者の間のボーダーが曖昧になっている。Napsterによる、既存のレコード会社を通さないユーザ間での音楽ファイルの交換などがその例だろう。

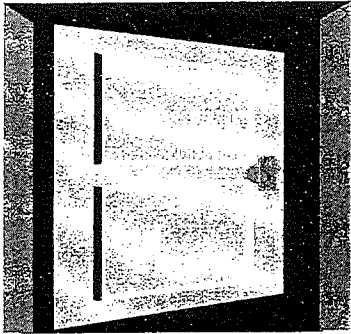
このNapsterの学術論文版であるDocsterという発想を目にしたことがある。Napsterと同じように、Peer to peer技術を利用して、既存の出版社を通さず論文ファイルを流通させようという考えであろうが、Napsterのサービス自体が昨年アメリカの連邦地裁で差止命令を受けてしまっている。

しかし、この差止命令は著作権の残存している音楽ファイルに対するものであり、ファイル交換という技術そのものを禁止するものではない。このPeer to peer技術の発展により、すでに音楽産業はその使命を終えた、と指摘するインターネット法学者もいる。音楽ファイルにしる、論文ファイルにしる、インターネット上ではどちらもデジタルのファイルである。出版においても、デジタルファイルとして流通させるのであれば、既存の出版社を介さずとも流通させることは十分に可能である。「暴利」を食う出版社や学会に対する不満の声は常に図書館界で聞かれる

が、出版でも、生産、流通、消費の間でのボーダーは、技術的にはなくなりつつあるではないか、と思うのだが。

インターネット活用法とは程遠い内容になってしまった。本人はインターネットで曖昧になるボーダーについて書いたつもりだが、普段インターネットを遊びや暇つぶしで使っていたことが多いものだと反省しているところである。

よしだ・まこと(京都大学工学研究科物理工学系図書室)



ブラウジングの楽しみ

大館 和郎

昨年の大図研京都セミナーのテーマは「ネットワーク環境下における図書館サービス」だったが、「図書館」のところは他のことばでいくらかでもおきかえられる。例えば、「美術館」「博物館」「書店」「出版」「行政」等。

今日われわれが情報を発見し、入手するためかなりの部分を図書館なしですませることができるようになってきた。そういう意味でネットワーク環境下で図書館は一つの選択肢にすぎない。ネットワークにつながったパソコンさえあれば、自宅に居ながらにしてある程度の情報を入手することは可能だ。

私は去年、高槻市に転居したが、今年の1月10日から市立図書館のホームページが開設された。蔵書検索の画面からは、「書名」「著者名」「出版社」「一般件名」「個人件名」を手がかりに所蔵情報を知ることができる。貸出状況や予約状況は出ないので、行っても実際に利用できない場合もありうるが。

情報探索時間の節約という観点から見れば、インターネット上で情報を入手するのに比べて、図書館へわざわざ出向くのは効率が悪い。しかし、ブラウジングの楽しみというものはインターネット上で実現できないのではないか。本棚で偶然、思いがけない本と出会うという体験は効率性とは正反対のものである。

かつては小さな街の本屋さんでもそういうことが体験できたが、コンビニ感覚の書店が増殖してくるとそういうことも少なくなってきた。しかしそういう書店ばかりではない。田口久美子氏によると(*1)、ジュンク堂書店は「平台」というほとんどの書店が持つ仕掛けを抑え、書棚をできるだけ高く、そしてできるだけ沢山の本を展示販売できる棚づくりをめざしているそうだ。

そして初めての客が書棚を見渡したときにその構成方法をすぐに了解し、探していた本がすぐ見つけられ、振り向くとそこにもっと欲しい本が見つかるというような書棚が理想とされている。

このあたりの棚についての考え方は図書館より柔軟かも知れない。似たもの同士をいったん集め、次ぎに同レベルの差異別に分け、差異の近いものを隣り合わせに置く積み重ねでジャンルを表現する。ここまでは図書館の書棚の配列方法と同じである。ただ図書館では本の背に貼られたラベルの分類番号に従って配列されているため、論理的だが融通性に欠ける。書店の書棚ではこれがないためジャンルの設定と他のジャンルの関連づけの自由度が高い。たとえば「現代日本の大衆文化」というジャンルを設定して、そこに「人気者の社会心理史」(NDC 361)「テレビがやって来た」(NDC 699)「大林宣彦の a movie book 尾道」(NDC 778)「宮崎駿を読む」(NDC 778)「戦後演劇を撃つ」(NDC 772)「アニパロとヤオイ」(NDC 726)「音楽誌が書かない J ポップ批評 16 されど我がユーミン」(NDC 767)のように NDC では分散してしまう本を一箇所に乱入させることも可能である。

しかしある特定の資料の入手だけを目指して、目的意識的に書棚を見る場合は、これでは探しづらい。そういうときは店内に設置してある客用の検索機で探すことになる。特にあてがあるわけではないが散歩するような気分で書棚の本を眺めやるのを一

方の極とし、焦点を絞り込んだ図書探索を他方の極とするなら、このふたつの態度の間をゆれ動いているのが現実の利用者（客）のありようではないだろうか。

当初はある特定の本を探しにやってきて、ありそうな書棚に視線を走らすうちに、「こんな本がある」という予想外のうれしい発見をすることがある。インターネットの画面上でこれと類似の体験は可能だろうか。

注1) 田口久美子「利用者が求める快適な環境づくり」『情報の科学と技術』Vol.52, No.1

おおだて・かずお（京都学園大学 総合研究所事務室）

鈴木書店の破産について

大綱 浩一

人文・社会科学系専門書の取次会社である鈴木書店が12月7日(金)、東京地裁に自己破産を申請したことが先頃、報道されました。

それは出版流通事情に疎い私にでも、「大変なことになった」と感じさせる程、大きな扱いです。たとえば、次の新聞記事のとおりです。

「鈴木書店、破産へ」	2001(平成13)年12月7日(金)	p. 1
「良書の流通に暗雲」	2001(平成13)年12月7日(金)	p. 38
「専門取次はなぜ倒れたか」	2001(平成13)年12月8日(土)	p. 15
「書店の専門書減る？」	2001(平成13)年12月8日(土)	p. 37

とはいえ、「ではどれほど大変なことなのか」この本質を理解できていたわけではありません。実際のところ、それはどれほど大変なことなのでしょう。

この本質を理解するには、次の文献が役に立つかもしれません。

小田光雄. 出版社と書店はいかにして消えていくか：近代出版流通システムの終焉. ぱる出版, 1999. 6.

この本質は、どこにあるのでしょうか。各社の経営にあるのでしょうか。それとも出版流通システム(出版社 取次 書店)にあるのでしょうか。それとも印刷メディアにあるのでしょうか。

また、この影響はどこまで及ぶのでしょうか。単に流通が滞る程度で済むのでしょうか。それとも潜在的需要を顕在化させる機能が失われ、文化的所産の生産が滞るようになるのでしょうか。

今まさに変容しつつある社会システムの、変容の本質を読み解く必要性を感じました。

おおつな・こういち(国立情報学研究所)

2001 年度第 6 回大図研京都支部委員会報告

日 時：2002 年 1 月 15 日 (火) 19:00-20:30
場 所：京都大学附属図書館 3 F スタッフラウンジ
出 席：赤澤、大館、金森、呑海、吉田

【報告事項】

1. 会員情報 ・変更なし
2. 財政情報 ・変更なし
3. その他 ・京都支部からの新春合同例会参加者は現在 3 名

【審議事項】

1. 1 日セミナーについて
・講師、テーマについて企画担当に一任中。
2. 支部報について
・2 月号について
・3 月号について
数珠つなぎ 江上さん
3. 休職中の会員の取扱いについて
・休職中の会員については、支部報発送を控えるとともに、会費徴収を取りやめる。
・退会とせず、休会扱いとし、復帰した時点で継続の意思の有無を確認する。
4. メーリングリスト登録者
次回支部委員会 2 月 5 日 (火)

会費納入のお願い

2001 年度までの会費未納の会員さんは、会費の納入をお願いします。

会費についての問い合わせは財政担当支部委員の吉田誠さん、又は、最寄りの支部委員又は、編集子までお願いします。

【編集後記】

会員のみなさん！

明けましておめでとうございます！

今年は、昨年以上にいろんな事件や高等教育をめぐる情勢が、激しく動く年になりそうですね。今、問われているのは、新しい時代の要請にマッチした大学創りかとはばかり思っていました。2002 年を迎えて、少し編集子も考えが変わりました。

今、本当に問われているのは、人間、そう、人類としても人間の良心ではないかと思うようになりました。

その理由は、自然破壊、環境問題、民族紛争、テロ、不況、企業の立てなおしの名の下で平然と行われるリストラ、戦争も拡大する勢いです。

これらを見ていると、本当に危機感を感じずにはいられません。

みなさんは、如何お考えなんでしょうか？